

2025 年度 2 月学生定例会議

1. 日時 : 2026. 02. 24 (Tue) 16:30 ~ 18:00
2. 場所 : SyDE 講義室
3. 議事 :

今年度最後の定例会議として、SyDE 紹介動画「東北大学 変動地球共生学卓越大学院 (SyDE) プログラム No.2」の成果報告を受けたあと、学生により今年度の振り返り並びに来年度のディレクションの設定について議論された。

■今年度の活動の振り返り

今年度は、研究交流・学習機会の拡大、留学生を含む多様なメンバーの参加推進、さらに国のプロジェクトとしての月例ポートフォリオ提出といった対外要件への対応など、多面的な取り組みが展開された。

以下では、特に顕著であった成果と、改善の余地が指摘された点を整理する。まず、ポスター発表会や他学科との交流機会が大きな成果として挙げられる。これらは研究内容を直接共有する実践的な場として高く評価され、特に留学生からも「進め方が明確でわかりやすかった」と好意的な意見が寄せられた。一方で、言語面の配慮に関しては、共通言語の確立や英語活用の推進には改善の余地が見られた。また、「アイデア創出のためのワークショップ」や「研究マッチング」は、他者の研究内容を理解する上で有効であり、参加者満足度が高かった。

ただし、大人数の場では意見を出しづらいという声もあり、提案を事前に回収する仕組み (Google Form) の必要性が指摘された。運営面では、月 1 回のポートフォリオ提出など負担が大きく、少人数の幹事体制では対応が困難であった点が課題として認識された。この点については、学年・専攻ごとに担当を配置するなど、持続可能な運営体制への移行が求められた。一方、イベントに関しては、研究関連だけでなく芋煮会のような交流イベントへの期待も強く、「毎回参加しやすい日程や形式の工夫が必要」との意見が挙げられた。参加者の多様性に鑑みれば、オンライン併用や時間帯の調整が今後の検討事項となる。

総じて、今年度は「研究交流」「企画の質」「コミュニティ形成」の面で多くの成果が見られた一方、「運営体制」「言語対応」「参加設計」「アイデア収集方法」などの改善ポイントが明確となった一年であった。

■来年度の運営に向けた方向性

来年度は、今年度の成果を引き継ぎつつ、以下の観点を中心に運営方針を再構築していく必要がある。

(1) 研究活動の高度化と継続的な発信支援

ポスター発表会は研究発信の基盤として評価が高く、これを定例イベントとして定着させる方向が望ましい。また、論文執筆技術の習得や申請書作成力向上に対するニーズも明らかであり、論文の書き方ワークショップ、学振に関する講演会、生成 AI の活用講座など、外部講師を招聘した学習機会の設置が有効と考えられる。

(2) コミュニティ形成と異分野交流の強化

研究室ツアー、マッチングイベント、季節交流イベントなど、「研究 × 交流」の両立を図るプログラムの継続・拡大が見込まれる。特に近年は留学生比率の増加もあり、日英併記資料、英語 Q&A 回の設定など、多言語環境を自然に運用できる仕組みの整備が望まれる。

(3)運営体制の強化と責任分担の明確化

今年度の反省を踏まえ、来年度は各学年・専攻からの代表者を配置することで幹事体制を強化し、企画設計を担う少数精鋭チームと、当日の運営を担う実行チームを分けるなど、負担が偏らない組織体制を整備する必要がある。議長については、鈴木氏・雁部氏が4月より担当することが提案されており、これに合わせて年度初回の会議で方針・役割・評価方法を明確に定義することが望ましい。

(4)インセンティブ設計による参加促進

企画やまとめ役の負担の大きさを考慮し、表彰制度など、適切なインセンティブの設計が学生のモチベーション維持のアイデアとして挙げられた。

■おわりに

今年度、世話人として1年間本プログラムの定例会議を運営に携わりました。運営にあたり、前田稜太（環境科学研究科）、齋藤隼輝（工学研究科）、菅井理一（工学研究科）、宮岸太一（工学研究科）、神田恵太郎（理学研究科）、浅野湖太郎（工学研究科）、蜂谷優友（文学研究科）、鈴木志門（工学研究科）、金野直人（理学研究科）、梅宮穂花（理学研究科）、松下奈津子（理学研究科）、雁部那由多（文学研究科）、岸田麻巳子（経済学研究科）より、多大なバックアップを受けました。ここに記して、謝意を表します。

（工学研究科 池本敦哉）